くまもとから緑文化を発信！

わたしのいえには、大きな木があります。
木のなまえは、しりませんが、その木に、すずめがとまります。
それに、からすも、とまります。
わたしが、木のそばにいくと、すずめとからすは、
にげていきます。そして、わたしが木から、はなれると、
また、すずめとからすがきます。
だから、わたしは、ずっと、いえのまどからみています。
すずめとからすは、木のうえで、そらをみて、
たのしそうに、おしゃべりしているみたいです。
いつでも、とりたちが、わたしのいえの木にこれるように、
木をたいせつにします。

水俣市立袋小学校一年　山下ゆうか

子供たちに緑を残そう。

生活環境、文化は一世代の問題ではありません。次の世代、そしてまた次の世代に受け継いでもらうものです。熊本に生まれ、育った子供たちが、大人になったとき、この作文に書かれたような緑を愛する気持が失われていなければよいですね。子供のこんな豊かな感性を守ってあげることも私たち県民の役目ではないでしょうか。

心を合わせて、実り豊かな植樹祭に。

今年は国際森林年

森林は、木材生産のほか、風雨や土砂流出を防いだり、自然のダムとして水を貯えたり、森林浴やレクリエーションの場を提供してくれるなど私たちの生活に多くの役割を果たしてくれます。

ところが、人間の手による乱開発で、特に、開発途上国の森林は毎年、日本の森林面積の八〇％に相当する二千万ヘクタールずつ減少しているともいわれます。

この危機感から、FAO（国連食糧農業機関）加盟各国が森林の現状や背景にある諸問題を広く国民に問いかけようと、今年を国際森林年と定めました。

折しも、本県では、来たる五月十二日、「阿蘇みんなの森」に天皇・皇后両陛下をお迎えして、全国植樹祭を開催することになっています。

テーマは「ひろげよう緑の文化」

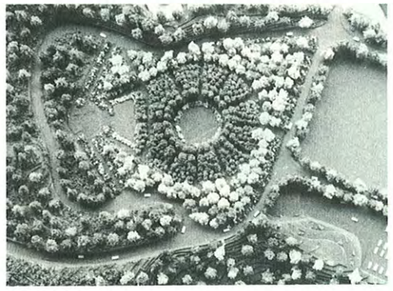
今回の全国植樹祭は、県の「緑の三倍増計画」実施の初年度に行われます。そこで、単に森林・林業の知識を伝達するだけでなく、街にみどりの豊かさを永続的につくり出す出発の祭典とします。

まず、植樹祭のテーマ、「ひろげよう緑の文化」を表現するために、会場では様々な広葉樹を使って熱気球を形づくります。これには、緑の基地を宣言した熊本から緑化精神が九州に、全国に、さらには世界へとひろがるようにという願いが込められています。

式典では、天皇・皇后両陛下のお手まき、お手植え行事のほか、友好親善関係にある中国広西壮族自治区、米国モンタナ州、韓国忠清南道、ブラジルの代表が出席、それぞれの地域を代表する樹木の種子が贈呈され、国際色豊かな大会となります。もちろん、次代を担う緑の少年団員をはじめとして県民も多数参加します。

このほか音楽を随所に活用、「自然」、「生命の誕生」、「未来」といったイメージを表現して、式典を盛りあげます。また、階段、掲揚台、ステージなど会場内の施設も、ほとんど木材を使用します。木材の使用方法だけでも実に二十種以上にも及び、その使い方を見るだけでも楽しめるような雰囲気づくりを準備しています。

阿蘇町蔵原の植樹祭会場（予想写真）



会場跡地は「阿蘇みんなの森」に。

植樹祭終了後の会場は、さらに周辺整備を進め、「阿蘇みんなの森」として後世に残す予定です。「緑のユートピア」というイメージの森林公園づくりを行う方針で、この公園をいくつかのゾーンに分け、熊本らしさを演出していく計画です。

たとえば、植樹祭で熱気球に形づくられる樹木園を、裕々と空を飛ぶ姿になぞらえて、「樹木園―裕の森」ゾーンとして残します。この森には三十六種類もの樹木が植えられ、それぞれの特徴がうまく生かされることでしょう。

優れた緑を育むためには人手がかかります。除間伐や枝打の技術を展示したゾーンは「優の森」と名付けます。

どんな大きな木でも、それは足もとの小さな木の芽から何十年もかけて育ったものです。いろいろな樹木や草が小さな芽を出しているゾーンを「由の森」として、植生観察の森とします。また、公園内には山小屋を設置し、子供たちが緑を語り合えるような場所を提供し、「友の棟」とします。

このほか、複層林の展示（慾の森）、スポーツの森（遊の森）、きのこの森（湧の森）、放牧の森（有の森）など、熊本の熊の音読み、「ユウ」を生かしてゾーン分類した、人と森とのふれあいの場を考えています。

地域に根づき始めた緑化活動

県下各地で記念植樹が計画中。

今回の植樹祭に際しては、県下各地でも市町村、団体が記念植樹を計画しています。

それぞれの土地柄や団体の性格に合わせて、趣向をこらしたさまざまな植樹計画は一月末まで百を超える数に達しています。（植樹祭準備室調べ）

以下、その計画のいくつかを紹介します。

●会場に隣接する久木野村では、植樹祭を盛り上げようと、大変な熱の入れようです。この機会に道路の沿線や町全体の美化を進めようと様々な案が出されました。その中心となるものが、村内全戸一本植栽運動です。

植えられる木は、県内でも珍しいアメリカハナミズキといわれる木で、その昔、ワシントンへ桜の木が送られたとき、お返しとして、アメリカから送られてきたという、日米親善の象徴的な木として知られています。

この計画は住民にも好評で、村内では、この珍しい樹木の話でもちきりです。

ハナミズキは、久木野村のほか、名水百選に入った白川水源をもつ白水村、あじさい街道で知られる長陽村、〝花の銀行〟の頭取さんが多い西原村でも植えられることになっています。各町村では、これを機に、南阿蘇地域を〝ハナミズキの里〟として、イメージアップさせようと、日本一づくり運動の一環とも考えているようです。

アメリカハナミズキ